

氏 名	吉田 敏子
学 位 の 種 類	博士 (医学)
学 位 記 番 号	第 5680 号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
学 位 論 文 名	児童養護施設入所児の身長発育に関する研究 ～心理的、社会的背景の身長発育に与える影響～
論文審査委員	主 査 新宅 治夫 教授 副 査 切池 信夫 教授 副 査 稲葉 雅章 教授

論 文 内 容 の 要 旨

【目的】

愛情剥奪症候群とは虐待を受けた児が成長障害を起こし発育不良を来す状態である。従来、被虐待状況と養育環境の改善により、速やかに発育が回復するとされてきた。著者は、施設入所となった児の中に、入所後も、身長標準偏差スコア(ht-SDS)の低下を続ける例を経験し、養育環境が改善されても身長発育が不良な場合があるのではないかという疑義を持つに至った。このため、児童養護施設入所児を対象に身長発育様式を解析し、その背景について検討した。

【対象】

4 児童養護施設に入所中の 278 人を対象に、入所中の身長測定記録を閲覧し、ht-SDS に変換、その経時的变化を後顧的に検討した。最終的な解析対象者は 193 人となった。

【方法】

全対象者の ht-SDS の経時的变化を個別に検討し、低下群、安定群、上昇群、変動群と分類した。また、入所理由、その他の背景を同定し、この 2 者(発育様式と対象者背景)の関係について統計学的検討を行った。統計学的検討には χ^2 乗検定、及び多変量解析(数量化Ⅱ類)を用いた。

【結果】

発育様式は、変動群 14 人、上昇群 23 人、低下群 43 人、安定群 113 人となった。発育様式と背景因子の関係は、低下群で乳児院経験者($P<0.05$)と入所時に低年齢であったものが有意($P<0.001$)に多かった。また、低下群では有意ではないが被虐待者が少ない傾向にあった($P=0.1$)。数量化Ⅱ類を用いた検討でも、入所時年齢が発育様式に最も影響を及ぼす因子であった。

【結論】

上記より、低年齢で軽微な養育環境の問題があった児では、施設入所後も ht-SDS の低下が持続する傾向があるのではないかと予想される。機序の詳細は不明であるが、入所前のストレスや栄養面での問題にかかわる影響が施設入所で環境改善がなされた後も一定期間持続する可能性がある。これらの影響は、入所時低年齢であるほど身長発育に強い影響を及ぼすものと考えられる。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

小児の養育環境はその発育に様々な影響を与えることが知られている。最近、虐待の増加に伴い愛情剥奪症候群による発育障害の早期発見と対策が課題となっている。従来、被虐待状況と養育環境が改善されれば、速やかに発育の回復がみられるとされてきたが、家庭の事情や養育環境不良により施設入所となった児の中に、養育環境の改善があっても身長発育が不良な場合も多くあるのではないかという疑義を持つに至った。本研究の目的は、多数の児童養護施設入所児を対象に身長発育の様式を解析することで、養育環境の改善と身長発育の関係について明らかにすることである。

対象は養育環境の不良等により大阪府下の児童養護施設 4 カ所に入所した 278 名である。全ての対象者における身長標準偏差スコア(身長 SDS)の変化を個別に検討し、身長 SDS の経時的变化のパターンにより低下群、安定群、上昇群、変動群に分類し、養育環境について比較した。

対象者の入所時での身長 SDS の平均は-0.34 と低値で、これらの児の一部では入所に至る過程にお

いて、既に成長障害を来していた可能性が考えられた。入所後の身体発育の経時的変化が検討できた 193 名のうち 43 名に身長 SDS の低下が持続して認められた（低下群）。低下群は入所時低年齢の者に有意に多く、また、有意ではなかったが、明らかな被虐待児に少ない傾向であった。これらの結果より、低年齢で軽微な養育環境の不良があった児では身長 SDS の低下が持続する傾向にあると考えられた。

以上のことから、家庭の問題で施設入所となった児の健やかな発育を考える時、特に入所時低年齢である児では、身長 SDS の経時的変化に留意し、低下を続ける児においては、成育歴の再評価及び医学的、心理的アプローチを通じた生活環境の調整を考慮する必要があると考えられた。

本研究は、施設入所児の発育過程の養育環境における社会的、心理的要因が、個体の発育に対し長年にわたる影響を及ぼすことを示唆したものであり、今後その対応を考える上で、寄与する点は少ないと考えられた。よって本研究者は博士（医学）の学位を授与されるに値するものと判定された。